

令和 7 年度 自己評価・学校関係者評価 報告書					
		学校番号	34	学校名	関有知高等学校
社会的役割等 (スクール・ミッション)	生徒の可能性を伸ばす地域に根差した高校として 確かな学力の定着や専門知識の修得を通して 地域社会で生きる力を備えた人材の育成を目指す学校				
学校教育目標 (教育方針)	生徒一人一人の「生きる力」を育むため、個々の能力や長所を伸ばし、優れた創造性と豊かな社会性をもった、逞しく実践力のある心温かな人間・「よき地域社会人」の育成を目指す ・学び直しや教科横断型の学習活動、キャリア教育などを通して生徒個々の能力や長所を伸長する ・礼儀・身だしなみ指導を徹底するとともに清掃活動を充実する。また、総合的な探究の時間や学校行事を通して、優れた創造性と社会性を育成する ・リーダーを中心とした自律的な部活動やボランティア活動を通して、実践力と温かい心の育成を図る ・生活デザイン科の魅力の増進に取り組む				
3 つの方針 (スクール・ポリシー)	どんな生徒を 育てたいか 【G P】	・ 地域の暮らしと仕事、文化を守り、よき地域社会人として社会に貢献できる生徒 ・ 基礎力を身に付け、優れた創造性と豊かなコミュニケーション能力を持ち、他者と協働できる生徒 ・ S D G s の視点に立ち、広い視野から思いやりの心を持って物事を考え、社会や地域の抱える課題の解決に、積極的かつ継続的に取り組もうとする生徒			
	生徒をどう 育てるか 【C P】	・ 生徒一人一人の個性や長所を伸ばし、深い学びを実現するための、基礎力の習得を重視したカリキュラムの編成 ・ I C T機器を活用した授業、習熟度別授業、少人数授業・ティームティーチング等の多様な授業形態及び評価を工夫した、個々に応じた細かな指導の実施 ・ 地域の暮らしや仕事に親しみ、地域文化の素晴らしさを実感するとともに、S D G s の視点から地域や社会の課題を考える体験の実施			
	どんな生徒を 待っているか 【A P】	・ 地域の暮らしや仕事、文化に興味を持ち、将来、地域の暮らしと仕事、文化を守り、よき地域社会人として地域の課題を解決していきたいと考える生徒 ・ 基礎力をしっかりと身に付け、自らその上にさらに深く学ぶことで、自身の可能性を伸ばし、進路目標を実現したいと考える生徒 ・ 思いやりの心とコミュニケーション能力を持ち、社会で他者によりよく関わり、社会貢献をしたいと考える生徒			
学校の抱える課題	・ 穏やかで心優しい生徒が多いものの、学業が苦手で計画的な学習習慣が定着していない生徒が多い。 ・ あいさつができる半面、自己表現やコミュニケーションが苦手であったり、自己肯定感が低い生徒が多い。 ・ 身だしなみや言動に緩さが見られる生徒がいる。				
教育指導の重点	領域・分野	今 年 度 の 具 体 的 な 重 点 目 標			
	学校経営	・ 学校全体の課題を解決するため、職員が丸となった組織的な活動の徹底をする。 ・ 総合的な探究の時間や学校行事を通して生徒の生きる力を育み、「よき地域社会人」としての規範意識の醸成を図る。			
	学習指導	・ 学び直しの授業の充実や補助教材の活用を通して、生徒の学習習慣と基礎学力の定着を促する。 ・ 教員相互による授業参観や研修、授業評価アンケートをはじめとする各種データを活用し、現状を客観的に把握したうえで授業改善や教育課程の改善を継続的に実施する。			
	生徒指導	・ 生徒の多様性を認めながら、学校生活での多様な人との繋がりが関わりを通して、お互いを認め支え合いよりよく生きる力を身につける。 ・ 集団生活に必要な規範意識や倫理観の育成を通して自他の命を大切にすることを育み、いじめの未然防止と生活安全の取組の充実を図る。			
	進路指導	・ 生徒が主体的に進路を選択できる能力を育成するため、体験的活動を多く取り入れることで、ニーズに応じた進路学習を提供する。 ・ キャリアプランナーをはじめ、関市や地域の外部団体との連携を通じ、望ましい勤労観・職業観を育成する。			

年 度 目 標				年 度 末 評 価 (自 己 評 価)			
領域分野	3つの方針・具体的な重点目標の達成に必要な 具体的な取組・方策	県教育振興 基本計画での 位置付け	達成度の判断・判断基準 あるいは評価指標	取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	評価 A. B. C. D	成果と課題	総合 評価 A. B. C. D
学校経営	・様々な行事を通じて、地域の人々につながることで、生徒のコミュニケーション能力向上を図る。	施策Ⅰ-1	・基礎力診断テストによる生徒の上位層への移行割合が70%以上。 ・総合的な探究の時間における学校独自アンケートの満足度の割合が高まること。	総合的な探究の時間を活用した関有知マルシェ(2年)、関有知地域探究(1年)の実施	B	○関有知マルシェの実施も3回目を迎え認知度も上がり、地域の方(来場者)・講師・生徒にとってよい取り組みとなっている。	
	・組織的継続的な授業改善を推進し、生徒の基礎学力を定着させ、社会で活用できる学力の育成を図る。	施策Ⅱ-8		中学校時の復習「学び直し」を取り入れつつ、高校の内容も進める授業で基礎学力の定着とともに生徒のやる気を育んだ。		○学び直しを取り入れた授業は、生徒に好評である。 ▲生徒個人の上位への移行を目指す。	
	・大学等専門機関や職域と連携し、生徒の将来に向けた興味を引き出す魅力ある学校づくりを推進する。	施策Ⅳ-20		市や大学、福祉施設、保育園、企業や店と事業の連携の実施。大学や企業の説明会への実施や参加。		○多くの行事への参加により、生徒の興味関心を高めることができた。 ▲情報の精査力をつけることが必要である。	
	・教員の長時間勤務や多忙化解消に向け、学校全体で業務の見直しを行い、働き方改革の推進を図る。	施策Ⅳ-27		行事の見直しやデジタル媒体の活用。		○回覧(デジタル)を活用することで、連絡の周知徹底ができた。	
学習指導	・学び直し授業の充実と補助教材の有効活用により、学習習慣の定着と基礎学力の向上を図る。	施策Ⅱ-8	・各学年の平均学習時間の10%上昇。 ・生徒による授業評価の総合評価3.8以上。	教科毎に定期的に課題を課し、学習習慣の定着を支援した。	B	○▲学習支援アプリの活用により、1年生は毎年、学習時間が減少するが今年度は維持できた。 ▲2年生も現状維持にとどまった。	B
	・授業を通じて知識・技能および表現力や規律を身に付けさせるため、積極的な授業改善を図る。	施策Ⅱ-11		本校の生徒に身に付けさせたい力を具体化させる研修を実施した。年2回(6, 12月)の生徒による授業評価アンケートと教員による授業の振り返りを実施し、課題を明確にし授業改善を行った。		○授業評価アンケートの総合評価が3.8(4点満点)と、高評価であった。 ▲教員相互でのフィードバックを充実させる。	
	・生徒のよりよい学びの実現に向け、将来を見据えた教育課程の見直しを図る。	施策Ⅳ-20		実態に合わせて、地歴公民の教育課程を改善した。		○授業の実態を踏まえて教育課程を一部改善した。	
	・実態に応じた研修や教員相互の授業参観等の校内研修を通して、学び合いの文化の醸成に努め、教員の資質向上を図る。	施策Ⅳ-26		クラスづくりや不登校生徒支援の研修を実施した。		○教員同士がコミュニケーションを促進できる場となり、意見交流を通して様々な気づきを得ることができた。	
生徒指導	・コミュニケーション能力や自己表現力の向上を図り、人との関りや繋がりを通して他者と協力し、地域社会に貢献できる人材の育成に努める。	施策Ⅰ-1	・保護者対象の学校評価アンケートの肯定的結果が80%以上。 ・生徒意識調査において、生徒指導の目標に対する達成度が80%以上。	新入生・在校生を対象にしたグループエンカウンターを実施した。ボランティア活動を通し、地域活動に貢献した。	B	○年度初めにグループエンカウンターを実施し、クラスに馴染みやよい環境づくりに取り組んだ。	
	・多様性への理解と偏見や差別のない生活を実現するため、学校の諸活動を通して人権意識の醸成を図る。	施策Ⅰ-2		学校の諸活動における教員からの声掛け、グループエンカウンター、SOSの出し方教室、人権講話等を通して人権意識の醸成を図った。		○保護者対象の学校評価で「いじめや差別を許さず、厳格に対応している」という項目の「わからない」が昨年に比べ大きく減少した。	
	・挨拶活動での見守りや丁寧な教育相談の実施により、生徒の変化を見逃すことなく、いじめの未然防止と早期発見に努める。	施策Ⅰ-3		MSLあいさつ活動の実施。 教員による登校時の見守りと声掛けを実施。 アンケート等でのいじめの早期発見、対応。		○生徒の85%が悩みや相談事に親身に対応してくれていると評価している。	
	・自他の命を大切にすると態度の育成を図るため、健康安全教育や防災教育を組織的・計画的に実行する。	施策Ⅲ-19		保健指導及び年3回の命を守る訓練の実施。 生徒、教員対象の救命講習の実施。		▲SNSなど教員の目につきにくいトラブルの対応が難しい。生徒の話に耳を傾け未然防止と早期発見・対応にあたる必要がある。	
進路指導	・具体的な進路目標を明確にするため、生徒の実態に応じた行事の実施により、主体的に進路を決定できる力の育成を図る。	施策Ⅰ-1	・進学希望者の合格率及び就職希望者の内定率が100% ・インターンシップ実施後のアンケートで生徒と企業の満足度が高まること。	ようこそ先輩、大学見学ツアー、進学・企業説明会等の行事を通じ、進路目標を決定して行くことができた。	A	○各学年節目ごとに進路行事を設けることができ、体験を通じて進路について考えることができた。 ▲早い行動のため見通しを持った指導する。	
	・進路教材の見直しを図り、個々の学力にあった課題を提供し、学習習慣の定着及び創出を目指す。	施策Ⅱ-8		Classiによる個別の学習支援においては、取り組み状況に個人差はあるが、進んで取り組んでいる生徒は、基礎学力の到達度評価を向上させている。		○意識の高い生徒は十分な取り組み(学習時間の増加)と学習到達度の向上が見られた。 ▲上記生徒を増やす施策を学年含め考えたい。	
	・地域の産業界や関係機関等と緊密な連携による活動を通して、各企業への理解を深めることで、職業観・勤労観を育成する。	施策Ⅱ-13		企業見学ツアー、職業探究インタビュー、インターンシップ、ビジネスプラス展では生徒が実際に見て会話を職業について知るきっかけとなった。		○生徒のニーズに合った選択ができるようにサポートできた。○企業が学校へ説明する機会も増やせた。 ▲時期を合わせるのが難しい。	
	・キャリアプランナーと連携し、企業情報の収集や卒業生の就労状況を紹介することで、より生徒に適した職業教育を推進する。	施策Ⅰ-4		キャリアプランナーの活用により、地元の企業の求める人材についての詳細な情報をえることができた。		○就職希望者への情報提供が充実している。 ▲求人数が増加しており、企業の求める求人数及び人物像に対応しきれない。	

来年度に向けての改善方策等

実施日：令和8年1月8日

学校関係者評価

実施日：令和8年2月5日

・例年12月に行っていた保護者懇談を1月に計画。(11月末に後期中間考査、12月10日前後に修学旅行があり、成績処理や懇談準備の日程が非常にタイトなため)
・関有知ジモト大学(1年時)関有知マルシェ(2年)を、関有知地域探究という名称にして、一貫性を図る。
・ヘルメットの着用を明文化。
・朝の登校時の降車場所をグラウンド南側道路のみに変更(今年度は南側道路及び東側道路)
・文化祭準備期間のLHR活用時間を少し減らし、より集中して準備に臨む態勢をつくる。
・学習支援アプリを活用した基礎学力の向上と家庭学習の定着に向けてのしくみの更なる充実を図る。
・行事アンケートや外部テストなどをもっと活用し分析を密に行い、改善策を模索する。

・ホームページがとてもみやすいし、よく更新されている。もっとみるきっかけづくりを考えるとよい。
・学び直しや少人数授業が魅力となっている。
・ボランティア活動や探究活動など学校の外に出たことを通しての生徒の質的な成長を記録として残していくとよい。
・ヘルメットの明文化をした後の対策が大切である。
・生徒がいきいきしているように感じられてとてもいい。(学校紹介動画)